



TITLE:

# 現代イギリス英語とアメリカ英語 におけるprovide A B 型とprovide A with B 型構文のコーパス研究

AUTHOR(S):

磯, 智憲

---

CITATION:

磯, 智憲. 現代イギリス英語とアメリカ英語におけるprovide A B 型と  
provide A with B 型構文のコーパス研究. Zephyr 2017, 29: 59-71

ISSUE DATE:

2017-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/227416>

RIGHT:

# 現代イギリス英語とアメリカ英語における *provide* A B 型と *provide* A with B 型構文のコーパス研究<sup>1</sup>

磯 智憲

## 1. はじめに

本研究は現代アメリカ英語(以下、AmE)と現代イギリス英語(以下、BrE)における動詞 *provide* の構文分布に関するコーパス研究である。*provide* という動詞は他動詞としての場合、辞書や文法書によって掲載する前置詞は多少異なるが一般的には前置詞 *to*, *for*, *with* を選択することが知られている。

### (1) Provide A with B (以下、*With*-type)

You'll provide me with written reports on your progress (...). (COCA, 2012. FIC)

### (2) Provide B to A (以下、*To*-type)

We have a common objective and provide information to them.  
(COCA, 1997.MAG)

### (3) Provide B for A (以下、*For*-type)

(...) we began to provide care for the sick (...). (COCA, 2013. SPOK)

これら以外にも文法書や研究論文の中で *provide* の二重目的語構文の用法 (以下、*DO*-type) について言及しているものがある。例えば、Quirk et al. (1985: 1210) では *provide* が選択する構文の種類を分類しており、その中で *DO*-type は AmE における用法としている。さらに同様の記述は Mukherjee & Hoffman (2006: 158)においても見られ、*provide* は AmE のような変種においては非常に確立した用法であると記している。しかしながら、いくつかの研究 (Goldberg 2011,

---

<sup>1</sup> *DO*-type と *With*-type の選択の理由は2つ挙げられる。まず、統語的観点から *With*-type と *DO*-type が間接目的語を先に選択するという点で類似しており、*alternation* の点でその関連性が高い可能性が考えられるためである。この点については Mukherjee (2001)においても *provide* B to A と *provide* B for A の2項について比較していることから同様に A そして B の順に現れる構文同士の比較は意味があると思われる。

次に Mukherjee & Hoffman (2006)や Quirk et al. (1985)での指摘を考慮すれば、一見すると *with* の省略形に見える *DO*-type と *With*-type の間の違いの有無を調査することで少なくとも現在の用法の特徴については得られるものがあると思われるためである。

Mukherjee 2005, Mukherjee & Hoffman 2006 など) を除いて *DO-type* についての実質的な研究というのは非常に少ない。

本研究ではこの *DO-type* と前置詞 *with* を伴う構文 (以下、*With-type*) の構文分布について調査を行う。データは *British National Corpus* (以下、BNC) と *Corpus of Contemporary American English* (以下、COCA) からのものである<sup>2</sup>。

本研究の目的は二つある。一つは *DO-type* が AmE において発達しつつある構文であることのデータでの提示、もう一つは *DO-type* と *With-type* の間には使用に関しては違いがあるということデータを実際の生起例において語用論的な観点から考察することである。

本研究の構成は次の通りである。2 節では *DO-type* を含め、*With-type*, *To-type*, *For-type* の構文分布に関する先行研究を概観する。3 節では本研究の手法を述べ、4 節で得られたデータを基に量的な考察、また 5 節では *DO-type* と *With-type* の使用に関する違いを示す例と共にその違いを語用論的に考察していき、6 節で本研究の目的に対する知見をまとめ、本稿を結ぶ。

## 2. *Provide* の構文分布に関する先行研究

### 2.1. 通時的観点から

通時的な観点から見ると、*provide* の *DO-type* は松本(2004: 72)によると、*provide* の *DO-type* の登場は 16 世紀の初めであり、初期近代英語期に 15 世紀に登場した *With-type* (松本 2005: 89 を参照) に頻度を圧倒されたとされている。しかし圧倒されたとはいえ、Coleman & De Clerck (2011: 206) では 18 世紀の *provide* では *DO-type* が確認されている。しかし Coleman (2011) では *valency* との関連から *provide* は現在、*DO-type* を選択する動詞ではないと述べられており、すでに述べた文法書や先行研究の言及と類似したものになっている。

これらの通時的研究の考察と Quirk et al. (1985) や Mukherjee & Hoffman (2006) での主張を考慮すると、AmE における *provide* の *DO-type* は通時的変化の中で復活しつつある用法という可能性が考えられる。

---

<sup>2</sup> データの提示についてはすべて 100 万語あたりの調整頻度である。粗頻度については補遺の表 1 に掲載している。

## 2.2. 共時的観点から

前置詞を伴う構文と二重目的語構文の関連については *dative alternation* や *benefactive alternation* といった枠組みで様々なアプローチがとられてきた。しかしこの交替をしないとされた動詞、すなわち前置詞を伴う構文のみ、あるいは二重目的語構文のみの選択しか許されない動詞も知られており、例えば、*envy* は二重目的語構文を選択せず (林 2004、Levin 1993 などを参照)、本研究の対象動詞である *provide* は二重目的語構文を選択しない動詞として伝統的に認知されてきた。しかし動詞によっては交替をする動詞グループに参入するものもあるとされる。そのような動詞の一例が本研究の *provide* である。実際、*provide* の構文分布についてのコーパス研究はいくつか存在する (Mukherjee 2001, De Clerck et al. 2011, Mukherjee & Hoffman 2006, Goldberg 2011 など)。

*DO-type* を除く他 3 種類の構文 (*With-type*, *To-type*, *For-type*) に関しては Mukherjee (2001) と De Clerck et al. (2011) において扱われている。*DO-type* に関しては両方の研究とも非常に少ない頻度しか確認されなかったため、考察対象から除外されている。他の種類について、Mukherjee (2001) では最も頻度の高いものは *For-type* であり、次に *With-type*、そして最も低いものは *To-type* であるとしている。さらにこの傾向は AmE、BrE の両方において同様であると述べている。De Clerk et al. (2011) においてもこの頻度順位は類似していると述べ、見解は一致している<sup>3</sup>。

これらの研究において *DO-type* が除外されており、さらに Levin (1993) においても *DO-type* としての用法は挙げられていない。Stefanowitsch (2011) においては *provide* を ‘non-alternating’ verb の部類に入れられている。*DO-type* の低頻度による考察対象からの除外や *DO-type* を選択する動詞としては扱われていないことから実際に使用されていない、さらに言えば、文法的ではない構文という印象を受けてしまう。しかし Huddleston & Pullum (2002: 312) では ‘*provide* is (...) marginal in the ditransitive construction’. となっていることから非文法的な構文ということではないように思われる。実際、COCA

---

<sup>3</sup> 両研究において、*For-type* がもっとも頻度として高い構文であるという結果が提示されているが、Hunston & Francis (2000: 97) では ‘(...) *provide* typically used with the pattern V n with n (‘provide someone with something’)(...)’. とされており、*With-type* が *provide* で見られる一般的な構文と位置付けている。

での調査では以下のように *DO-type* の例も見つかる。

(4) Provide A B (以下、*DO-type*)

(...) you can provide them information about engineering (...). (COCA, 2006, SPOK)

すでに述べたことからわかるように *DO-type* に関する言及はされており、AmE での用法であることや、一般的な構文ではないことなどが挙げられているが、AmE について扱った研究は少ない。その中でも現代 AmE を対象としたものが東・田島(2011)である。この研究では *TIME corpus* の 10 年分を用いており、集計した全 740 例中、*With-type* (253), *For-type* (257), *To-type* (215), *DO-type* (15) という分布で *DO-type* は全体の約 2% という結果になっており、その点では Huddleston & Pullum (2002) の言及に沿っている。通時的観点の *With-type* が *DO-type* を圧倒したという事実は Goldberg (2011) の AmE での調査においても ‘statistical preemption’ という考え方において考察されている。statistical preemption については (2011: 133) において ‘the preemption process is straightforward (...) because the actual form serves the identical semantic/pragmatic purpose as the preempted form’. という説明があり、*With-type* がこの説明の the actual from であり、*DO-type* が the preempted form に相当するものとして扱われている。

以上から *DO-type* は通時的な視点では一定数確認された用法であったが、現代英語においては見られない、あるいは、非常にまれという見解が広がっていることは推察される。このことを踏まえて以降の節では本研究のデータ収集の方法とデータ概観、考察を行うことにする。

### 3. 方法論

#### 3.1. コーパスデータとその提示

この節では本研究の手法について述べる。使用コーパスはすでに述べたように BNC と COCA を用いることとし、データ収集は以下の条件に従う。

(a) *DO-type* と *With-type* が対象で、*provide* はレマ形態で加算する。

(b) A の対象は代名詞の *me, you, him, her, us, them* and *it* とする。B は

名詞全般を対象とする<sup>4</sup>。

(c) データの提示は全体頻度の比較、ジャンル別頻度の比較、構文の通時変遷の3つの観点からのものとする。

### 3.2. データの抽出方法

コーパスの検索には適合するものであっても実際に見てみると結果として全く対象構文ではないものが含まれている。そのため、調査方法は [provide] (me, you, him, her, us, them, it) [n\*] と [provide] (me, you, him, her, us, them, it) with [n\*] とする。また代名詞と [n\*]、with と [n\*] の距離は最大の [0:9] とし、対象外のものを除外していく方法を採用。以下がその一部である。

#### 1. Provide A (=her as possessive case) B<sup>5</sup>

... Remedios was a foreigner who migrated to provide her love and assistance in a new land. (2003, ACAD)

#### 2. Provide A B (=apposition of A)

Black people are providing us filmmakers with a certain amount of empowerment. (1995, MAG)

#### 3. Provided (*provided* as conjunction) A (=her) B

That could come this month – provided her aches don't sideline her. (2008, MAG)

2 と 3 で挙げた例は判断が容易だが、1 については他の2つと比較するとその判断が難しい場合がある。それについては前後関係から判断し、除外した。

### 4. データ分析とその考察

この節では3節で述べたように全体頻度の比較、ジャンル別頻度

---

<sup>4</sup> この方法でのデータ抽出であるため、passive voice の表現は含まれていない。なお A を代名詞に限定したのは *With-type* において A with B において [A with B] というまとまりのものではなく、[A] with [B] というまとまりとして確定的に頻度を加算するためである。

<sup>5</sup> この her の取り扱いに関しては、Lyne (2006: 43-44) が動名詞の研究において以下のように述べている箇所がある。

Pronouns with female reference have the same form – her – for both the possessive determiner and the objective pronoun, and this form is therefore difficult to consider in studies on pronoun variation (...).

の比較、構文の通時的変遷の3種類の観点からデータを提示し、それに対して考察を行う。

#### 4.1. 全体頻度の比較

まずここでは AmE と BrE における *With-type*, *DO-type* の全体頻度の比較を行う。



図 1. AmE と BrE における *DO-type* and *With-type* の全体頻度

この図は2種類の構文の全体頻度を示している。まず AmE で明らかなのは *With-type* と比較するとまだ低頻度ではあるが、*DO-type* を選択しており、BrE と比較すると明らかな差があることが示されている。この点については Mukherjee & Hoffman (2006: 158)での主張と一致した結果を示しており、また同時に *DO-type* は AmE の用法であるという Quirk et al. (1985)の分類の正当性も証明する結果となっている。

次に *DO-type* と比較すると、*With-type* は AmE と BrE の両方において *With-type* が高く、BrE に関しては AmE での頻度の約2倍の頻度を得ていることが明らかに示されている。また AmE では *With-type* と *DO-type* の間で比較すると Goldberg (2011: 22)の AmE の調査で指摘されているように *With-type* による preemption が生じていることを示している。

要約すると、*DO-type* は AmE の方が頻度として高く、その点では Quirk et al. (1985)の AmE の用法という指摘の正確性を証明する結果となった。

#### 4.2. ジャンル別頻度の比較

##### (a) BrE の場合

ここではまず BrE について見ていくことにする。次の表は BrE における構文のジャンル別の頻度を示したものである<sup>6</sup>。

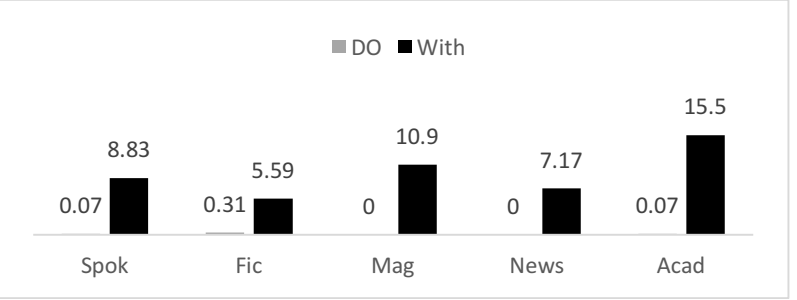


図 2. BrE における DO-type と With-type のジャンル別の頻度

4.1 で示した全体頻度から BrE ではほぼ DO-type が観察されず、With-type が優勢な頻度を保っていることがわかった。この図によると、Academic における頻度が最も高く、それに Magazine, Spoken が続いているが、*provide* という語が *give* など授与に関係する動詞と比べて比較的に難易度が高い語であるということも原因になっていると思われる。この分布は With-type が BrE において広く浸透している構文であるということを示している。

(b) AmE の場合

次の表は AmE におけるジャンル別の頻度を示したものである。

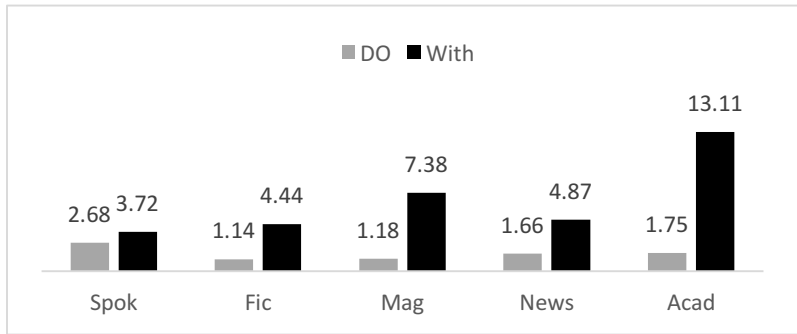


図 3. AmE における DO-type と With-type のジャンル別の頻度

<sup>6</sup> 本研究におけるジャンル別頻度の提示に関しては、BNC と COCA におけるジャンルは同じもののみを表示している。



この図において *DO-type* の頻度は *Spoken* において最も高く、それに *Academic*、*News* と続く。*Spoken language* と *Written language* という大枠に分ければ、*Spoken language* としての頻度の方が高い。このことから *DO-type* は口語的な表現であるという可能性も十分考えられる。

*With-type* に関しては *Academic* での頻度が最も高く、*Magazine*、*News* と続く。*BrE* での *With-type* の場合と傾向として異なることは *Spoken* での頻度が他のジャンルと比べて低く、また書き言葉に関するジャンルにおいての方が傾向として頻度が高いということである。断定することはできないが、大まかな傾向として *DO-type* は *AmE* においては *With-type* と同程度に *Spoken* で用いられていることがわかり、その点では *DO-type* が口語的な表現であるという可能性は考えられる。*With-type* に関しては *BrE* では *Spoken* での頻度は他のジャンルと比べても少ないということはないが、*AmE* においては *With-type* は *Spoken* での頻度は他のジャンルと比べても最も低く、*BrE* と *AmE* において *With-type* に関して異なる結果となった。

#### 4.3. 構文の通時的変遷

以下の表は *AmE* における *With-type* と *DO-type* の頻度を年代ごとに表示したものである<sup>7</sup>。

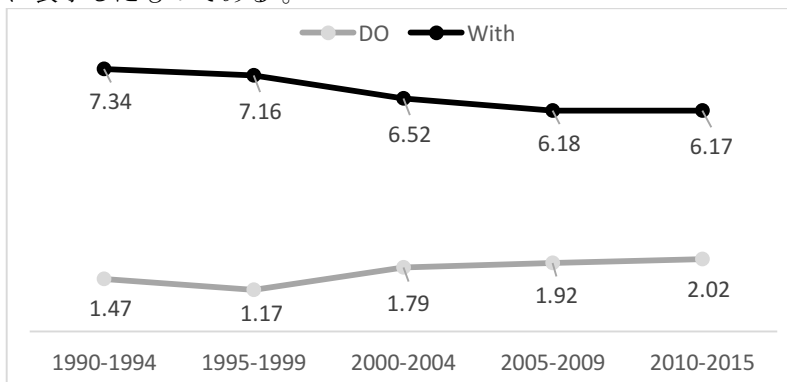


図 4. *AmE* における *With-type* と *DO-type* の通時的な変化

<sup>7</sup> *With-type* と *DO-type* の本研究におけるデータ間の差は  $\chi^2$  乗検定による以下の結果により、有意な差であると示されている。X-squared = 197.14, df = 1, p-value < 2.2e-16

図 4 に示されているように *With-type* の頻度は 1990-1994 の期間が最も高かったが、そこから 7.34 (1990-1994) そして 6.17 (2010-2015) となり、緩やかだが減少傾向を示している。一方で *DO-type* の方に関しては 1.47 (1990-1994) から 2.02 (2010-2015) へと非常に緩やかだが増加していることがわかる。さらに興味深いことに、この 2 つの構文を比較すると、*With-type* の緩やかな減少傾向と *DO-type* の緩やかな増加傾向が対照的になっている。次の節では 4 節で示したようなデータを語用論的な観点からも考察する。

### 5. *With-type* と *DO-type* への語用論的考察

これまでで *With-type* と *DO-type* には頻度的に差があることを示した。ここからはデータで見られたいくつかの例に対して語用論的に考察を行う。

- (5) A: (...) We're trying to say, we can provide you  
B: a package.  
A: with a comprehensive package.  
C: Um  
D: Yeah. (BNC, SPOK, 1993)<sup>8</sup>

この抜粋は鉄道会社の会合における発話であり、話者 A (以下、A) の発言の途中で話者 B (以下、B) が *DO-type* で発話を加えており、その後に A が自身の *With-type* としての発言を行っているという構造を成しているように一見すると思われる。しかしこの例において A が B の発言の後に行ったものは意図的な構文の変更ではなく、A 自身の発言の間で B が名詞だけを先走って述べたということであり、よって A も B も自身の意図した表現をした状況であるという解釈は考えられる。なぜなら、*DO-type* の頻度は非常に稀であるという結果が提示されており、この点から意識的に *DO-type* から *With-type* への変更をするほど *DO-type* を構文の一種と意識していることは考えにくいからである。結果としてはこの例は構文の変更ではなく、ある種の繰り返し (repeating) であると考えられる。この点については Clark & Wasow (1998: 207) において以下の説明の例として解釈することが可能であると思われる。

---

<sup>8</sup> この例で示されている A から D はそれぞれの発言をした者を指すものであり、コーパスでの表示を改変したものである。

(...) there must be one way of delivering an utterance that is considered appropriate to the circumstances, and that is the ideal delivery. Repeating a word is an attempt to redo a constituent in its ideal delivery.

ideal delivery とは適切な状況で適切な発話を行うという発話手段のことであるとされている。この(5)における発話においてはすでに述べたように、A の発言は B の発言に対する意図的な構文の変更ではなく、A がこの状況において適切な構文の使用という ideal delivery を行ったと解釈することが可能である。このことを部分的に証明することは B から A という一連の発言に見られる情報提示の構造の変化に見られる。B においては ‘a package’ は抽象的な情報であるが、その後の A の発言では ‘a comprehensive package’ と述べられており具体的な情報に更新されている。情報のより具体的な描写はこの発話状況における適切な表現であったと考えられ、それに伴い、A は *With-type* を用いたという解釈が十分可能である。(5)の場合とは異なり、実際に訂正を目的とする場合は以下のような例で示されるものである。

(6) They were going to never be able to provide us the... with the computer.  
(COCA, SPOK, 2002)

これは Clark & Wasow (1998: 231) で言われている instant repair の例にあたるものである。この例ではまさに即座に構文の訂正が行われている。すなわち、‘provide us the computer’ という完結した発話をする前に *With-type* に訂正されている。このように instant repair の場合にはより複雑な言語表現を追加せずに訂正が成立すると考えることが自然に思われる。なぜなら Arnold et al. (2000: 46) では言語生産に関する処理に関して以下のようなことを述べているからである。

(...) phonological processing should be more difficult for long, complex phrases than shorter ones, simply because they contain more linguistic material.

このことからやはり (5) の文は構文の変更を示すものではないと思われる。ここで考えなければならないことは、では AmE の場合には構文を変えるということはあるのか、またその場合、違いを意識してのものなのか、ということである。以下はこれらのことへの部分的な回答を示している例である。

(7) they're the people who will provide you a car and a driver for a price. And they'll even provide you with a translator. (COCA, SPOK, 1996)

(5)の場合とは異なり、(7)では単一の話者による発話であり、ここではまず *DO-type* を用い、その後で *With-type* を用いている。*DO-type* においては 'for a price' があることでこの例における *DO-type* では 'you will have a car and a driver by paying money' という所有関係が成り立っている<sup>9</sup>。しかし、この後の発言では *DO-type* として 'provide you a translator' ではなく、*With-type* を用いている。この構文の変更は(5)の場合とは異なり、変更が意図的なものであり、何らかの違いを考慮してのものである可能性がある。またこのことは 'even' という語によって 'a car and a driver' と 'a translator' の情報価値の違いを持たせているということからも言える。

語用論的な観点からの考察によって *DO-type* と *With-type* との間には何らかの違いがあり、それによって使用が異なる可能性を示した。もちろん AmE での使用のすべてにおいて構文の変更が上記のように違いを意識したものであるわけではないが、(7)のような例の存在は構文としての違いの意識が存在していることを部分的に裏付けることは可能である。

## 6. 結論

本研究では *provide* における *With-type* と *DO-type* の構文分布を調査した。それによっていくつかのことが示唆された。

まず、量的分析によって *With-type* と *DO-type* では *With-type* の方が BrE においても AmE においても優勢であり、*DO-type* の方は BrE ではほぼ見られず、AmE では Quirk et al. (1985: 1210) や Mukherjee & Hoffman (2006: 158)での言及通りに一定数の頻度が確認され、BrE よりも頻度が高かった。ジャンル比較において BrE と AmE の両方の英語において *With-type* は広く見られる構文であることは示された。また *DO-type* が Spoken において最も高いということも示された。また通時的な観点からこの AmE の *DO-type* のデータはこの構文が AmE で発達しつつある構文であるということを示していると考えられる。

語用論的な考察からは *With-type* と *DO-type* には何らかの違いがあり、それに影響を受けて使用が異なる可能性が示された。この違

---

<sup>9</sup> この関係については Goldberg (1995)を参照

いについては意味的な違いや文体、また社会的な要因など様々に考えられるが、その点については今後多角的に調査、考察する必要がある。

#### 参考文献

- Arnold, Jennifer E., Thomas Wasow, Anthony Losongco & Ryan Ginstrom. 2000. Heaviness vs. newness: The effects of structural complexity and discourse status on constituent ordering. *Language* 76(1): 28-55.
- Clark, Herbert H. & Thomas Wasow. 1998. Repeating words in spontaneous speech. *Cognitive Psychology* 37(3): 201-42.
- Colleman, Timothy. 2011. Ditransitive Verbs and the Ditransitive Construction: a diachronic perspective. *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik* 59: 387-410.
- Colleman, Timothy & Bernard De Clerck. 2011. Constructional semantics on the move: On semantic specialization in the English double object construction. *Cognitive Linguistics* 22(1): 183-209.
- De Clerck, Bernard, Martine Delorge & Anne-Marie Simon-Vandenberghe. 2011. Semantic and pragmatic motivations for constructional preferences: A corpus-based study of *provide*, *supply*, and *present*. *Journal of English Linguistics* 39: 359-91.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. 2011. Corpus evidence of the viability of statistical preemption. *Cognitive Linguistics* 22(1): 131-54.
- Hunston, Susan & Gill Francis. 2000. *Pattern grammar: A corpus-driven approach to the lexical grammar of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levin, Beth. 1993. *English verbs classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lyne, Susanna. 2006. The form of the pronoun preceding the verbal gerund: possessive or objective?. *ICAME Journal* 30: 37-53.
- Mukherjee, Joybrato. 2001. Principles of pattern selection: A corpus-based study. *Journal of English Linguistics* 29: 295-315.
- Mukherjee, Joybrato & Sebastian Hoffman. 2006. Describing verb-complementational profiles of new Englishes. *English World-Wide* 27: 147-73.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

- R Development Core Team. 2013. R: A Language and Environment for Statistical Computing, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. Available online at <<http://www.R-project.org/>>
- 林高宣. 2004. 「二重目的語構文とその拡張例における意味の違いについて」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』 38: 21-33.
- 東真千子・田島松二. 2011. 「現代アメリカ英語における ‘provide A with B’ 型構文とその類型について: ‘Provide A with B’, ‘provide B for/to A’ and ‘provide A B’ in Present-day American English」『別府大学紀要』 52. 11-19.
- 松本浩一. 2004. 「初期近代英語における *provide* 類動詞が現れる二重目的語構文: Double object construction including *provide*-type verbs in early modern English」『長崎大学教育学部紀要人文科学』 69: 67-80.
- 松本浩一. 2005. 「二重目的語動詞 *supply* 点描: Notes on the double object verb *supply*」『長崎大学教育学部紀要人文科学』 70: 81-92.

### Corpora

- British National Corpus* (BYU-BNC): 100 million words, 1980-1993. Available online at <<http://corpus.byu.edu/bnc/>> Accessed 12 November 2015.
- The Corpus of Contemporary American English* (COCA): 410+ million words, 1990-present. Available online at <<http://corpus.byu.edu/coca/>> Accessed 12 November 2015.

### 補遺

表 1. 対象構文の粗頻度

	<i>DO</i> -type	<i>with</i> -type
AmE (COCA)	693	3,326
BrE (BNC)	14	1,150